

European Living in Japan



京都の大蔵流狂言師 茂山七五三(しげやま・しめ)氏は、月に2回、地元の素人役者さんに狂言を教えている。入れ代わり立ち代わりやってくる生徒に稽古をつける

師匠のかたわら、オンジェイ・ヒーブルさんは欠席者の代役をいつでも務められるように待機している。休憩時間には、その流暢な日本語と気さくな人柄から、ちびっ子役者にひっぱりだこ。長身で端正な顔立ちの彼は、ちびっ子のお母さんたちにも人気のようだ。

しかし、ひとたび師と向き合うと、表情は瞬時に固くなり、ただならぬ気迫が全身を包む。かっと見開いた目は、師匠の一挙手一投足を見逃すまい、と真剣そのもの。たちまち、緊迫感が稽古場に広がる。

狂言との出会い

オンジェイさんは、1977年、チェコ首都プラハから100kmほど離れたパルドヴィツェという町で生まれ、兄と両親の4人家族で育った。1989年の東欧革命で共産主義体制が崩れ、にわかさまざまな文化に触れることができるようになった中で、彼は日本や中国の武術

日本で活躍するヨーロッパ人

The Czech Making Kyogen More Accessible for People in Europe

ヨーロッパに狂言を広めるチェコ人

室町時代に誕生し、600年の歴史を持つ狂言。庶民の生活に起こるちょっとした出来事を題材に、独特なせりふ回しと動きで観客を笑いに誘うこの古典芸能に、時代、国境、そして文化を越えて惚れこんだヨーロッパ人がいる。京都在住のチェコ人、オンジェイ・ヒーブルさん、30歳。オンジェイさんは、狂言役者としての修業を積みながら、京都とプラハという2つの古都を笑いで結ぶことに奮闘している。

や文化に興味を持った。

狂言と出会ったのは15歳の時。「狂言の台本をロシア語からチェコ語に翻訳している、クレイチーという監督に話を聞く機会があり、『骨皮(ほねかわ)』という台本を読んでみたら、すごくおもしろかったです。『骨皮』は、権威に対する風刺が忍ばせてある演目だ。権威(=宗教)に関するジョークはタブーだと思っていた上、日本といえば、坐禅や武道といった「真剣」なものしか浮かばなかったオンジェイさんは驚いた。

「そのうち監督に勧められ、実際に『骨皮』を上演することに。日本大使館でビデオを借り、クレイチー監督にパントマイムと演技の基本を教えてもらい、見よう見まねで演じたところ、観客には喜ばれました。ただ、その時は、狂言のせりふ回しが独特なものだとは知らず、日本人はみなああいったイントネーションで話しているのだ、と思ってました」

高校を卒業したオンジェイさんは、カレル大学日本語学科に入学。これが、彼のその後の人生を大きく左右するきっかけとなった。

師匠との出会い

1998年、プラハと京都の姉妹都市提携記念事業で、狂言一座がプラハにやってきた。日本語学科の学生として、お手伝いを引き受けたオンジェイさんは、初めて本物の狂言を目の当たりにし、役者の圧倒的な存在感と、この芸術の奥深さに

衝撃を受けた。楽屋で役者さんを質問攻めにするうちに、気づいたら「ぜひ、いつか、プラハでワークショップをやってください」と頼み込んでいた。「準備を整えてくださるのなら、参りましょう」と二つ返事で答えてくれたのが、人間国宝を父(千作氏)に持つ、茂山七五三氏だった。

帰国した七五三氏に、オンジェイさんは、日本語で一文字一文字、心をこめて手紙を書いた。その熱い思いが通じ、2000年、七五三氏は狂言指導のため、再びプラハに足を運んでくれた。もちろんオンジェイさんは、この第1回チェコ狂言ワークショップを成功させるため、事務方・役者・通訳として奔走した。

2002年、日本語と狂言の勉強を進めるため、オンジェイさんは同志社大学大学院に交換留学生としてやってきた。「来日したことを七五三先生に手紙で知らせたところ、3日後、突然、大学の寮の外で『チェコからやって来たオンジェイ君はいるか』という、大きな声が聞こえました。先生が直接、寮まで会いに来





てくれたのです。それはもううれしくて、部屋から飛び出していました」。

七五三氏にはオンジェイさんと年齢の近い2人の息子(宗彦・逸平両氏)がいる。2人とも狂言役者だ。オンジェイさんにとっては若先生であると同時に、ジョークを言い合う飲み友達でもある。来日して間もなく、宗彦さんから「いいか、オンジェイ、『ありがとう』の一番ていねいな表現は、『まことにかたじけない』だぞ」と教えられたオンジェイさんは、冗談だと知らずに、そのまま大学教授に使ってしまい、教授本人はもちろんのこと周囲も困惑させたことがある。「かしこまりました」と言うべきところを「かしこまってござる」と言ってしまったこともある。「今では大笑いですが、そのころは普通の日本語と狂言の日本語の違いがよくわからなかったのです」。

運命の出会い

当初1年半の予定だった留学期間は、あっという間に過ぎ、オンジェイさんはさらに奨学金をもらって滞在を延ばすことにした。その間、2004年には2度目のチェコ狂言ワークショップも行った。

ワークショップではチェコ語で狂言を上演する。オンジェイさんはチェコ人の役者たちと相談しつつ、時には言い合いをしながら、日本語の台本をチェコ語に置き換えていく。「音節が母音で終わる日本語に対し、チェコ語や英語は子音で終わるので、言葉が響かないという問題があります。また、狂言の独特なイントネーションをそのままチェコ語でまねすると、とても変です。その辺を考えながら、チェコ語のせりふを練っていきます」。しかし、擬態語については日本語をそのまま用いるという。「物を食べるとか、痛

がってるとかは、動きを見ればわかるし、音も日本語の方が響きますから」。

ところで、狂言のユーモアはチェコ人に受け入れられるのだろうか。「庶民が権力者をからかう話は万国共通でおもしろいものだし、狂言のジョークはとても人にやさしいと思います。言葉は違っても、観客は同じタイミングで笑うんですよ」と、オンジェイさんは説明する。

2005年3月、同志社の修士課程を修了したオンジェイさんは、狂言の修業を続けるとともに、古典芸能についての知識を深めるため、大阪大学大学院を受験、演劇学科能狂言専攻博士課程に進んだ。ただ、アパートを借り、生活費を切り詰める毎日はずらく、一時は、もうチェコに帰らざるをえない、とあきらめかけた。

「そこに運命の出会いがやってきました。愛知万博でチェコ館の催事の通訳や司会の仕事を1週間引き受けたところ、その後、万博事務局の催事管理センターから声がかかり、万博期間中はもちろん、終了後も関西にあるイベントプロダクションから仕事に来るようになりました。おかげで生活は楽になり、本当に助かりました」

広がる出会い

現在オンジェイさんは、学業と修業、そして狂言の普及に没頭している。今年の夏には、国際交流基金やEU・ジャパンフェスト日本委員会などの援助を受け、第3回チェコ狂言ワークショップも開催した。そんなオンジェイさんの次の目標は何だろうか。

「来年、チェコの役者を日本に招いて、集中稽古と舞台を経験させるつもりです。また、9月には茂山千五郎家の若手がパリのルーブル美術館の中庭で薪(た

きぎ)狂言を上演する企画が持ち上がっているんで、ぜひお役に立ちたいと思っています。また、2009年3月には、現在執筆中の『国際化する狂言』という論文を仕上げ、阪大を修了したいし、同じ年、プラハで第4回狂言ワークショップを開き、きちんとした公演をやる予定です。チェコで狂言に興味を持つ人が増え、そういった人たちが狂言を楽しむ機会が増えることが私の望みです」

このように意欲的なオンジェイさんに対し、師匠七五三氏は「オンジェイの舞台上での発音はいいし、能・狂言をしっかり学問しているので、このまま続けてくれたらありがたいな、と思ってます」と、エールを送る。

長期的には、日本とヨーロッパの間の文化の橋渡し役をやっていきたい、と熱く語るオンジェイさん。何年か先には、彼が広告塔となって、ヨーロッパだけでなく、お膝元の日本でも狂言人気をさらに高まるかもしれない。



Ondrej HYBL
オンジェイ・ヒーブル

大阪大学大学院生(能狂言専攻・博士課程)・大蔵流狂言茂山千五郎家修業生

1977年チェコ・パルドヴィツェ生まれ。1996年国立カレル大学(プラハ)日本語学科に入学、同大学院博士課程に進む。2002年来日、同志社大学大学院国文学科に入学。同時に大蔵流狂言師茂山七五三氏に師事。2005年、同博士前期課程(修士)修了後、大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士課程に進み、能・狂言を専門に研究。現在、自ら狂言役者として修業を積むかたわら、母国チェコや、来日する外国人の間での狂言普及に努める。